『海域アジア・オセアニア NEWSLETTER』創刊号：68-72 (2023)

東京の「狐の行列」における中国人の集まり

李　婧

インバウンド観光客が戻ってきた

2023 年 1 月 4 日の日本経済新聞に「インバウンド再起動」というタイトルの記事が掲載された。コロナ禍となり一瞬で消失した外国人観光客が再び日本に戻りつつあることを反映した記事であった。わたし自身、新宿などでアジア系の観光客が買い物をする姿を見かけるたびに、インバウンド観光客が戻ってきたことを実感し、中国人観光客の姿を見て感慨に浸った。2015 年以降に観光客数や旅行消費額で注目された中国人観光客も、コロナ禍になってすっかり姿を消していたからだ。中国人観光客の行き先は買い物が楽しめる都会だけではない。東京郊外の町にも彼らはいた。そうした町の 1 つには、わたしが 7 年間フィールドワークを続けてきた東京都王子も含まれる。

中国人に注目される「狐の行列」

王子といえば、毎年大晦日に行われる「狐の行列」が有名である。「狐の行列」の特徴は、現場で様々な種類の狐のグッズが展示されることや、観客までもが行事に参加し、あたかも「狐になった」かのような化粧や服装をすることである。「狐の行列」を見物に来る者にとっては、狐の顔に似せたメイクをしたり、狐の仮面を被ったりする参加者の姿が物珍しく目に映っているようだ。だからこそ、様々な人が興味をかき立てられて集まってくるのだ（写真 1)。

写真 1　「狐の行列」に展示される狐の大面とその周りに集う人々の様子（2019 年 6 月、王子狐の行列の会　実行委員会より提供）

「狐の行列」に参加する中国人観光客の人数は、2010 年から 2019 年までの間に驚くほど増えた。その頃の「狐の行列」の現場は、どこに行っても中国語での喋り声が聞こえるぐらいに中国人観光客で溢れていた。彼らは遠くから狐の格好をした人々の行列を見るだけで満足できず、地元の人々と同じように狐の格好をして行列に加わった。来日前にインターネットで「狐の行列」のことを調べて、狐をイメージした着物を用意する者もいた。

さらに、中国人観光客は「狐の行列」の現場で撮った写真や動画を WeChat や「小紅書（RED）」という、中国で人気のアプリでアップしたり、TikTok でライブ中継したりする（写真 2）。「狐の行列」は中国人観光客や在日外国人が集う場になり、その様子は SNS を通じて中国本土まで拡散されている。

写真 2　中国のユーザーが「小紅書（RED）」にアップした「狐の行列」体験（2023 年 3 月 10 日閲覧、「小紅書（RED）」アプリより転載）

ホストになった中国人

「狐の行列」に参加する中国人には、ゲストとして行事を楽しむ者だけではなく、中国語での案内や通訳といった作業を行うスタッフもいる。中国人観光客の急増により、彼らへの対応を務めるホスト側の中国人が必要となったからである。実際に、王子では中国話者のボランティアも募集されている（写真 3）。ボランティアはほとんどが在日中国人留学生であ

り、「狐の行列」の現場で中国人観光客相手の案内や通訳を担当するほか、商品販売や行列の整列、設営と片付けなど、あらゆる作業にかかわっている（写真 4）。

写真 3　中国人ボランティアがつける中国語対応のプレート（2023 年 7 月 1 日、筆者撮影）

写真 4　狐の大面を設営する様子、黄色い半纏を着用している中国人ボランティア（2018 年 12 月 31 日、筆者撮影）

ただし、在日中国人留学生が「狐の行列」でボランティアとして働く動機には、かなりのバリエーションがある。わたしが聞いた彼らの応募目的は、「狐の行列が面白そうだから」という行事自体への純粋な興味にとどまらないものであった。例えば、中国東北部出身のボランティアは「日本語をできるだけ上達させて、地元に帰って日本語教師になりたい」と言っていた。そのための日本語の練習の場に「狐の行列」が選ばれたのだ。同じく東北部出身のボランティアは「中国にいた時に「「狐仙」（狐の神様）の話をよく聞いたから〔「狐の行列」を〕見てみたい」と語った。さらに、天津出身のボランティアは、「天津にも旧正月に「廟」（民間信仰に基づく地元の神様を祀る祠）に行く慣習がある。ここ（王子の神社）に来るのも同じ」と述べ、大晦日の「狐の行列」を故郷の年越し慣習に関連づけていた。

このように「狐の行列」に参加する中国人には、観光客として訪れる者だけではなく、ホスト側で働く者も少なからずいる。彼らにとって「狐の行列」は日本文化を体験する恰好の場というだけではなく、日本や中国での生活の延長にある場でもあった。東京都王子の地元住民が支えてきた「狐の行列」は、日本を訪れる中国人とのかかわりのなかでどのように変容していくのか。今後の展開に注目していきたい。

（り・せい　東京都立大学大学院）